

名作再読、拾い読み (30)

『喪服の似合うエレクトラ』(2) ("Mourning becomes Electra")

小澤文彦

ギリシア悲劇作家のソフォクレスもエウリピデスもそれぞれ『エレクトラ』という悲劇を書いています。オニールはアイスキュロスの『オレステイア』を基にして『喪服の似合うエレクトラ』を作りました。粗筋は以下の通りです。

アメリカ南北戦争が終結し、北軍の指揮官エズラ・マノンが戦地から帰ってきた夜、妻のクリスティーンは彼女の不倫相手であるアダム船長から手に入れた毒薬で夫を殺害します。断末魔の最中に偶然、娘のラヴィニアが部屋に入ってきてエズラの最期の言葉を聞き、床に転がっていた毒薬の箱を拾いました。ラヴィニアは、直ぐにでも父を殺した犯人である母を罰したいのですが、手助けをしたアダム船長をも罰するために、弟のオリンが帰国してから事を進めようと、慎重に復讐の時期を待つことにします。

母の愛人であるアダム船長は、本当は父の弟デイヴィッドとマノン家の使用人マリーとの間に生まれた息子でした。家名を守るためデイヴィッドとマリーは追い出され、彼等の存在を知る人は年老いた使用人のセスしかいません。デイヴィッドが酒浸りになって死んだ後、息子のアダムは船員で航海中のために連絡が取れず、生活に困ったマリーはエズラに援助を求めました。しかし、若い時に自分の求愛を断って弟のデイヴィッドを選んだマリーをエズラは許さずに見殺しにしたのです。航海から戻って母の死んだ状況を知ったアダムは、マノン家に復讐するために接近してきたのです。

ラヴィニアは、戦地から戻ってきたオリンに父の死の真相を話すが、彼は自分の母が犯人とは到底信じられません。彼は母を愛していて、母とは恋人同士のように二人だけで南海の島に住みたいという夢を持っていたのです。父の葬式の後、ラヴィニアとオリンは外出した母の跡をつけ、母がアダム船長と密会する場面を目撃します。オリンも遂に母の裏切りを確信し、母が立ち去った後で、アダム船長をピストルで撃ち殺しました。ラヴィニアは母にアダム船長を殺したのは自分とオリンだと打ち明け、母は絶望して飛び降り自殺をします。その後、オリンは罪の意識に苛まれて精神的に不安定に

なり、それを心配したラヴィニアは、静養のため彼を南海の島へ連れて行きました。彼女は島の男性に恋をして美しくなり、緑色のドレスを着ると、母親そっくりの姿になります。オリンは、彼女が親しくなる男性は皆、アダム船長に似ていることに気付きました。また、彼は母と瓜二つの姉を見ているうちに母が恋しくなり、それと同時に自分達の罪深さを悟って家に戻ることを主張します。ラヴィニアは嫌でも家に戻らざるを得ませんでした。オリンの帰国を知って、恋人のヘイゼルは直ぐにオリンに会いに来ますが、彼は自分たちが結婚できないこと、また彼女の兄のピーターがラヴィニアとの結婚を望んでいるがそれも許されないことだと言い、殺人の罪を告白した文書を残して自殺します。オリンの死に気が動転したラヴィニアは、ピーターに結婚してくれと迫りますが、その時、彼にアダムと呼びかけてしまいました。彼女は心の底ではアダム船長に恋をしていたのです。ピーターはショックを受けて立ち去りました。後に残ったラヴィニアは、家族の死に絶えた屋敷の中に独り閉じ籠もって生きていく決心をします。

親子間の複雑な愛憎心理、特にエレクトラコンプレックス (Electra complex)^{*}がラヴィニアを通して恐ろしくも悲しく胸に迫ってきます。

劇中で何度か、使用人のセスの渋いバリトンの声で歌われる「シェナンドーア」の歌は、その哀愁を帯びた旋律を実際に耳にすると、滔々と流れゆく河の水に人の嘆きや悲しみが洗い流されていくように感じられることでしょう。

^{*}Electra complex《精神分析》エレクトラコンプレックス《娘が父親に抱く潜在的な性的思慕と母親への敵意; →Oedipus complex》(ウイズダム英和辞典) 参考文献

1. 呉茂一〔ほか〕編 『ギリシア悲劇全集』第1巻 (人文書院、1960)
2. Eugene O'Neill "Mourning becomes Electra" (in "The plays of Eugene O'Neill", Random House, c1954-1955)
3. ユージン・オニール著 菅泰男訳 『喪服の似合うエレクトラ』(『ウィリアム・バトラー・イェイツ、ジョージ・バーナード・ショー、ユージン・オニール』[ノーベル賞文学全集20]より) (主婦の友社、1972)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)